

(申込〆切1月27日まで)

申込 Googleフォーム

<https://forms.gle/87obos9NkAAeBrigM6>

Zoom オンライン

10:00-13:40 (JST)

2022年1月29日(土)

遺構と記憶

オンライン公開シンポジウム

10:00-10:15 趣旨説明

司会 林みちこ

10:15-10:35

芸術実践を通じた公共空間の発掘
—歴史遺構を拠点とする市民との
協働制作をめぐる—

山田健二 (美術家 / 東京藝術大学大学院映像研究
科専門研究員 / 文化庁新進芸術家海外派遣制度令和
3年度研修員) ※ニューヨークから中継

10:40-11:00

「ザ・ファミリー・オブ・マン」展
(1955年)のパネル展示について
—1930年代の写真壁画の系譜に
ついて—

土山陽子 (早稲田大学大学院文学研究科)

11:05-11:25

沖縄を描くことについて

与那覇大智 (画家 / 沖縄県立芸術大学非常勤講師)

11:30-11:50

忘れられた戦争 出雲の戦争遺跡
から見えること

高嶋敏展 (写真家 / アートプランナー)

11:55-12:15

戦犯が遺した言葉—梶鴨遺書編集
会編『世紀の遺書』(1953年)を
めぐって

川村笑子 (筑波大学大学院人間総合科学研究科博
士後期課程芸術専攻)

12:20-12:40

カナダの日系二世美術家

ロイ・キヨオカと1970年大阪万博

下山雄大 (筑波大学芸術専門学群美術史領域3年
/ 筑波大学先導的研究者体験プログラム(ARE)採択者)

12:40-12:50 休憩

12:50-13:30 総合討議(40分)

13:30-13:40 閉会

パネリスト発表 各20分×6人

「遺構」は歴史をとどめる場として、特に戦争
や災害の痕跡をとどめる記憶の場として、絵画・
写真・映像作品など様々な芸術作品の主題と
なってきました。国家的なページェントの痕跡
もまた「遺構」と言えるでしょう。つくば市に
は1985年万博(つくば科学博)の会場跡が残っ
ています。なかでも「ゆかりの森」はカナダ館
スタッフの宿泊施設として地元の財界人により
設置されたことが忘れられたまま、40年近く
経た現在は市民のレジャー施設として使用され
ています。筑波大学芸術系では2020年度(令
和2年度)より、この場所を現代美術の実践の
場として再整備するための調査を始めました。
万国博覧会という祝祭の遺構を、国境を越えた
多様性、平和と公正さを包摂する場所として再
活用することを目指しています。本シンポジウ
ムでは万博を考察する前段階として、「遺構」「記
憶」を考える際に直面する戦争遺構の表象を課
題と設定し、アーティストと美術史研究者が各
自の制作や研究について発表し、語り合います。

研究代表者 芸術系教授・芸術学学位プログラムリーダー(山崎美
研究分担者 芸術系准教授 林みちこ
問い合わせ先: michikohayashi@gelitsu.tsukuba.ac.jp



山田健二 YAMADA Kenji

美術家・東京藝術大学大学院映像研究科専門研究員・文化庁新進芸術家海外派遣制度令和3年度研修員／東京藝術大学先端芸術表現科卒業、同大学大学院卓越助教、ロンドン芸術大学セントラル・セント・マーチンズ卓越講師を経て現職。権力や公共空間によって埋め立てられた歴史を市民との協働により社会に開き、「暴露」という表現行為を通して市民と歴史の関係性を再考する活動を継続。「Commissioned by KeMCo 2020」(慶應義塾ミュージアム・コモンズ, 2020)、「大量監視都市における表現の自由にむけて」(東京藝術大学, 2019) など。

山田健二《MITA Intercept》2021年, 3ch ビデオインスタレーション, 5分28秒 ©2021 yamadakenji.org.

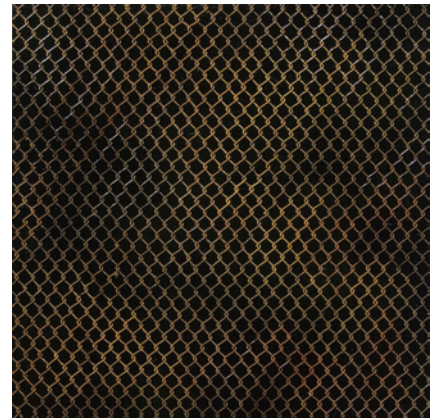
土山陽子 TSUCHIYAMA Yoko

早稲田大学大学院文学研究科／近現代美術史。論文に「ヴォルスの写真と絵画における形の考察」『美術史研究』第46冊、2008；「『人間家族』展(1955年)の冷戦後の復元による再解釈—1956年の日本巡回展との比較において—」『鹿島美術研究』年報29号、2012；「Photography and Narrative: The Representation of the Atomic Bomb in Photographs of Nagasaki from 1945 to 1995,」*Narratologia* 42, De Gruyter, 2014；« Visions utopiques de l'énergie nucléaire dans l'exposition *The Family of Man* et sa présentation au Japon dans les années 1950 », *Japon Pluriel* 11, Philippe Picquier, 2017 など。

与那覇大智 YONAHARA Taichi

画家・沖縄県立芸術大学非常勤講師／沖縄県立芸術大学美術工芸学部卒業、筑波大学大学院芸術研究科修了。文化庁在外派遣研修員として米国・フィラデルフィアに滞在(2005)。展覧会「沖縄プリズム」(東京国立近代美術館, 2010)、「マブニ・ピースプロジェクト沖縄2016」(県営平和祈念公園, 2016) など。個展多数。近年は韓国との交流展や「沖縄も私一つながっていることつなげること」(つくば美術館, 2020) など展覧会の企画も行っている。

与那覇大智《Home-裏庭の宴18.13-》2018年, 油彩・パネル, 72.7x72.7cm



高嶋敏展 TAKASHIMA Toshinobu

写真家・アートプランナー／大阪芸術大学卒業。民俗学、歴史学をふまえた作品制作を特徴とし、歴史的建造物、古民家、解体予定のモダンビルなどでの展示、アートプロジェクトを数多く手がける。2009年より「どこでもミュージアム研究所」代表。パーマネントコレクションにラフカディオ・ハーン・ヒストリカルセンター(ギリシア, 2014-)、個展「戦争の手ざわり」(出雲市立弥生の森博物館, 2015)、著作『松江と小泉八雲』(2021)、『忘れられた戦争 出雲大社神門通りの松ヤニ採取』(2021) など。

高嶋敏展《戦争の手ざわり》2019年, インクジェット・プリント, 32.9x48.3cm

川村笑子 KAWAMURA Emiko

筑波大学大学院人間総合科学研究科博士後期課程芸術専攻／武蔵野美術大学造形学部卒業後、京都の古美術商兼出版社に勤務。その後、東京藝術大学大学院美術研究科へ進学し修士課程を修了。同大学教育研究助手を経て、筑波大学の博士後期課程に進学。日本美術界における美術団体を中心に形成されたいわゆる「画壇」に着目し、特に研究史上の空白期とされる占領期における画壇の戦後体制形成の初期状況について研究を行う。

下山雄大 SHIMOYAMA Yuta

筑波大学芸術専門学群美術史領域3年／研究課題「ロイ・キヨオカを中心とする日系カナダ人美術家研究—トランスナショナルの視点から—」が筑波大学の先導的研究者体験プログラム(ARE)に採択され、戦後のカナダにおける日系人の芸術実践について研究している。筑波大学CAIR 2022(Campus Artist in Residence)キュレーター。